

聖書：マタイ 19：13～26

説教題：神にはできる

日時：2020年1月5日（朝拝）

今日の箇所には弟子たちの他に2種類の人々が出て来ます。それは「子どもたち」と「ひとりの金持ちの人」です。この人々は対照的です。片方は子どもであるのに対し、片方は大人です。片方はここに連れられて来た人たちで、何ら自分を主張できない者たちであるのに対して、もう片方は「私はどんな良いことをすれば良いでしょうか」と自分は何かできると思っている人です。また片方は財産を持っていない者であるのに対し、もう片方は多くの財産を持っています。この対比を考慮に入れて読む時に、ここにある大切なメッセージが見えて来ると思います。

最初は子どもたちがイエス様のみもとに連れて来られた記事です。人々はイエス様に手を置いて祈ってもらおうとして子どもたちを連れて来ました。しかし弟子たちは彼らを叱りました。13節が「そのとき」という言葉で始まっているように、これはイエス様が結婚・離婚・再婚また独身についての話をしていた時です。この大切な話がさえぎられないようにと考えたのかもしれませんが。あるいはこの時はエルサレムに向かう大事な旅の途中でしたので、そのスケジュールが遅れないようにという関心からだったのかもしれませんが。あるいは忙しいイエス様を煩わせないようにというイエス様への配慮からだったかもしれません。いずれにしろ子どもたちなんかには構っている暇はない。だから帰って、帰って！と弟子たちは追い返そうとしました。前に18章1～5節でイエス様が一人の子どもを呼び寄せて、「この子どものようにならなければ、決して天に御国に入れません」と言われた言葉を聞いた弟子たちでしたが、そのお心をなお理解していなかった彼らの姿が記されています。

イエス様はそんな彼らに「子どもたちを来させなさい。わたしのところに来るのを邪魔してはいけません。天の御国はこのような者たちのものなのです。」と言われ、子どもたちの上に手を置いてくださいました。ここにあるメッセージは、先の18章最初の部分でも見ましたように、神の国はただ恵みによる国であるということです。子どもたちは、特に当時の社会においては、まだ何もできない者たちとして見下されていました。現にここでも邪魔者扱いされています。しかしイエス様は彼らを大切に迎えることによって、神の国は何か立派なことをした人が、そういう自分を誇りながら入って行くところ

ろではないということを示しています。それはただ一方的な恵みによる国である。私たちは自分もそのようにして神の国に導き入れられ、今日もこのようにして生かされていることを思って神に感謝したいと思います。そして自分がそうしていただいたように、小さな者たちを軽んじず、むしろ大切にして迎え入れること。これが神の国の特徴であり、神に喜ばれることであると知って、そのように歩む者でありたいと思わされます。

さて私たちはここだけを読むと何か暖かい気持ちにさせられると思います。まだ何もできない子どもたちをそのまま受け入れ、祝福してくださるイエス様。同じように神の前で取るに足りない私たちを追い返さず、優しく受け入れてくださるイエス様。この方の前で私たちは子どものようであって良いのだと思わされます。そしてそれは特に難しいことではないかのように思います。ところが続く記事をセットで読む時に、そんなに簡単な話ではないということが分かって来ます。この時、一人の人がイエス様のもとに来て言いました。「先生。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをすればよいのでしょうか。」彼は今見た子どもたちとは対照的な人です。彼はイエス様に「私は何をしたら、・・・云々」と問うています。すなわち彼は自分が何かをすることによって（立派な行いをして）、それによってふさわしい者と認められて神の国に入ろうとしています。そんな彼にイエス様は 17 節のように答えられました。一見突き放した言い方のように思えます。なぜイエス様はこんな言い方をされたのでしょうか。おそらくこの人は、神から切り離して「良いこと」を考えていたように思われます。そしてその良いことを実践し、積み上げれば、永遠の命に達することができると考えていた。イエス様はそんな彼に対し、「良いこと」を考えるなら、ただお一人良い方である神に目を高く上げなければならないということに彼に教えようとしておられます。それをせずに、ただ自分が考える良い行いを積み上げて永遠の命を獲得しようとするあり方では決して得られないと。イエス様は「何をしたら？」と問う彼に対して、ただ一人良い方が言われる戒めを守りなさいと言われました。彼が「どの戒めですか」と問うと、イエス様は十戒後半の隣人愛の戒めをもって答えます。「殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽りの証言をしてはならない。父と母を敬え。あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。」この青年は、これを聞いてガッカリしたに違いありません。彼はもっと特別な何かをイエス様は語ってくれると期待していた。そしてそれを守れば私は救われるのではないかと。しかしイエス様は言われたのは、今までずっと聞いて来た言葉です。ありきたりの言葉です。そこで彼は言います。「私はそれらすべてを守ってきました。」私たちはこれを聞いて一瞬驚くかもしれません。誰が神の戒

めを「すべて守って来ました！」などと豪語できるだろう！と。しかし当時まじめなユダヤ人なら多くの方がこのように答えたようです。もちろん、それは表面的に戒めを捉えた場合のことであって、本当の意味では守れていないのではあります。しかしこのように答えた彼も何か欠けていることを自覚しています。それらの戒めを守っている自分なのに救いを得ている確信がない。永遠の命に入っているように思えない。そこで私に足りないことは何ですか？と尋ねたのです。

そんな彼にイエス様は21節のように言われました。「完全になりたいのなら、帰って、あなたの財産を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を持つことになります。そのうえで、わたしに従って来なさい。」 私たちはこれを聞いてショックを受けるかもしれません。イエス様について行くためにはここまでのことをしなければならないのか。救いはただ信仰によるのではなかったのか。何かをすることではないはずではなかったのか。こんなことを言われたら誰もイエス様について行けないのではないか、等々。もちろんイエス様はこれをすれば永遠の命を勝ち取ることができると言ったわけではありません。イエス様はこの言葉によって、この青年の一番の問題に切り込んで行かれたのです。二つに分けて考える方が分かりやすいかもしれません。まずイエス様はこの言葉によって、この青年にとって財産が偶像になっていることを示されました。十戒の最初の戒め、その後のすべての戒めの基礎となる第一戒に「あなたには、わたし以外に、ほかの神があってはならない」とあります。そして聖書で財産は容易に私たちの偶像となり得ること、神のライバルとなり、神を私たちの心から追い出しかねないものとなることが警告されています。もしこの青年が神にこそ信頼を置き、子どものように神の恵みに自らを委ねて歩む道を選ぶなら、イエス様のこの命令に従うことができるでしょう。しかしもしそれができないと言うなら、すなわち神を信頼したいと口では言うけれども、実際には財産に信頼し、あるいは自分が積み上げてきた名誉や地位や業績に信頼しようと思っているなら、その人は肝心の第一戒を守っていない。神を愛し、神に信頼するよりも、富を愛し、富に信頼している。これでは20節の「私はそれらすべてを守って来ました」という答えも正しいとは言えません。彼はそういう自分を認めて悔い改めなければなりません。神の戒めを守っていない自分に対する神の赦しと憐れみを希わなければなりません。

しかしこのことは自分の罪を告白し、赦しを求める祈りをすれば、後はこれまでと同じ生活を続けて良いということではありません。神ではなくお金という偶像に頼ってい

た私をお赦してくださいと祈って、それ以後も神に半分、お金に半分信頼するというそれまでと同じ生活、すなわち偶像生活を続けても問題ないということではありません。神への信仰は、その神の言葉に従う生活によって現されます。ですからこのイエス様の言葉に従うかどうかで彼がただ神の恵みに信頼して従う信仰者であるかどうかは明らかにされるのです。この青年の場合は「財産」が偶像となっていたため、イエス様はこのように命じられましたが、偶像は人によって色々です。イエス様はすべてのクリスチャンに今日の箇所と同じことを要求するわけではありませんが、では私には何と言われるだろうかと考えてみることは必要だと思います。私にとって神に従う信仰の妨げとなる偶像は何でしょうか。ある人にとってそれは趣味やスポーツかもしれません。ある人にとっては仕事、それに伴う名声、また成功かもしれません。ある人にとっては愛する家族、あるいは特別な誰かかもしれません。ある人にとっては罪深い行いや楽しみかもしれません。これらのことが神に第一に従う信仰の歩みを妨げるのでないなら、それは捨てる必要がないかもしれません。その人の中では絶えず神に従うことが第一に重要なこととなっていますので、もし神があればそれを捨てなさい、これを手放しなさいと言われるなら、いつでもそのことができるはず。しかしもしそれが神に従う生活を妨げるものなら、すなわちそれがその人にとって神に対するライバル、偶像となるものなら、私たちはそれらを自分の手から離さなければならない。そしてイエス様について行くことが必要です。そのようにして神にこそ信頼を置き、神に従う生活に永遠の命は豊かに味わわれるのです。この青年が何か私には足りないと思っていたのは、その生活が偶像礼拝生活であったからに他ならないのです。

果たしてこの青年はどうしたのでしょうか。彼はイエス様の言葉を聞いて「悲しみながら」立ち去りました。自分は財産を手放すことができないと思ったからです。彼にとって財産は神に従うより大事なことだったからです。「何をすれば永遠のいのちを得られるか」と「永遠の命」を熱心に求める振りをしていながら、本当のところではこの世における良い生活を優先していた彼の心が明らかにされました。その道を悲しみながら進むなら、喜びをもって生きることができる道を選び取れば良いのに！と思いますが、それだけ偶像の力は強いということでしょう。偶像に心を捕らえられて歩む人の悲惨さが印象的に彼の姿に示されています。

そこでイエス様は弟子たちにこう言われました。「まことに、あなたがたに言います。金持ちが天の御国に入るのは難しいことです。もう一度あなたがたに言います。金持ち

が神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうが易しいのです。」らくだが針の穴を通ることはもちろん不可能です。つまり金持ちが神の国に入るのは難しいというレベルどころかほとんど不可能であるということです。これを聞いて弟子たちは「それでは、だれが救われることができるでしょう」と叫びます。当時、裕福は神からの祝福のしるしと考えられていました。その人たちが神の国に入れないなら一体誰が入れるだろうか！と弟子たちは恐れたのです。それに対してイエス様は最後 26 節でこう言われました。「それは人にはできないことですが、神にはどんなことでもできます。」人間的には考えられないことでも神の前では不可能はない。これは神は私たちの心を変えて喜んで偶像を捨てさせ、神に信頼して従ういのちの道を歩むように導くことができるということでしょう。聖書にはそのような人の実例が沢山あります。例えばパウロ。彼はピリピ人への手紙 3 章 8 節でこう言っています。「私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、私はすべてを損とと思っています。私はキリストのゆえにすべてを失いましたが、それらはちりあくただと考えています。」彼は輝かしい業績を持つ当時の宗教界のトップスターのような人でしたが、イエス様と出会って価値観が全く変わりました。そしてイエス様を知る知識のあまりの素晴らしさゆえに、その他一切はちりあくたである、ごみ屑に等しいと言いました。比べ物にならないのです。彼はそのようにして主と共に歩むためには他のすべてを喜んで捨てて主に従いました。またこの福音書を書いたマタイもそうです。彼はもと取税人でお金持ちであり、お金に頼って生きていました。しかしイエス様と出会って弟子への招きを受けた時、即座に立ち上がって、それまでのものをすべて後ろに捨てて従いました。ルカの福音書 19 章に出て来る取税人ザアカイも同じです。お金に取りつかれていた彼が多くの人々に施しをする人に変えられました。またペテロやヨハネやヤコブは漁師でしたが、彼らもすべてを後ろに捨ててイエス様に従いました。この後、27 節や 29 節にそのことが出て来ます。その他、アブラハム、イサク、ダビデ、ソロモン、新約のアリマタヤのヨセフなども金持ちでしたが、みな主を第一として主に従う者となりました。これらはすべて「神にはできる！」という恵みのみわざの例証です。

この新しい年、私たちが招かれているのも、この恵みにより頼む歩みです。子どものように神に信頼し、ただ神の恵みによって導かれる歩みです。この恵みの道を進むために私たちにも捨てるべきもの、自分の手から離すべきものはないでしょうか。先に述べましたように、それが神に第一に信頼して従う生き方とぶつかったり対立するものでないなら、私たちはそれらを保っていて良いのです。そしてそれらを神の御心にかなうよ

うに用いば良い。しかしもしそれが神に信頼する信仰の歩みの妨げになるものなら、イエス様は今日の御言葉を通して私たちにも語っておられると思います。それを保った状態では「いのち」を味わうことはできません。偶像を保ったままでは、今日の箇所に出て来た青年が「何がまだ欠けているのでしょうか」と問うたように、救いの喜びも確信も持てないのは当然です。それどころかそのままなら、やがて「悲しみながら立ち去る」という最悪の状態に至るかもしれません。そうならず、いのちの内に歩むために大切なことは、神にこそ信頼し、神と共に歩むことであり、その妨げとなるものを取り除くことです。そしてただ恵みによって導いてくださる神に信頼して従って行くことです。それは人の頭で考えれば難しいこと、できないことですが、神にはどんなことでもできます。その神を仰いで、このまことのいのちの道を今年も歩む者としてくださるよう祈り求める者でありたいと思います。自分の知恵と力に信頼して、いつも「何か足りない」と顔を曇らせる歩みをするのではなく、私たちに慈しんでくださる全能の神に信頼し、その方を第一として従って行くところにある喜びといのちの祝福に生かされて行きたいと思います。